

はじめに

1月になり、雪の降る日が多くなりました。ロチェスターの雪質は、金沢のそれと大きく異なりサラサラとした粉のような雪で、天気が悪い日には凍えるような寒さとなります。しかし、雪の降る日が何日も続くことはあまりなく大した積雪はありません。

また、今月になりインターセッションと呼ばれる自主学習が始まりました。本報告書では、それについて記します。

インターセッション

インターセッションは、冬休みの1月4から22日までの期間で行われるもので、調べ学習からレポートとプレゼンを完成させるものです。これは、本学の派遣留学の学生のためにアメリカで過ごす期間を一か月長くするために設けられたプログラムであるため、私たちを除いて参加する学生はいません。本来のインターセッションの目的は、自国に帰らず冬休みをキャンパスで過ごす留学生のための期間で、彼らは授業を取ながら冬休みを過ごしています。

先述したようにインターセッションは、自主学習で進められます。しかし、最終提出までに担当教員との進行具合や質問をするためのミーティングが設けられています。他にも、草稿を提出する日にちが決められており、自分自身を管理しながらの3週間となりました。

課題内容は、自身の専攻から興味のあるトピックについての調べ学習です。私は、機械工学の内容から複合材料に興味があったので、これについて今日までの発展の経過と将来への展望について調べました。この学習に取り組むにあたり英作文や文章の展開など英語学校で学習したすべての内容のアウトプットができ、派遣留学を締めくくる最後のプロジェクトとして有意義なものであったと思います。

シャトルバス

私は、秋学期からRITインで生活を送っています。RITインからは、シャトルバスがありますが一台のバスで十か所近くの停留所を回っているため、一本乗り過ごすで一時間近く待つ必要があります。秋学期のシャトルバスは、6か所の停留所別にバスが運行していましたのでインターセッションの期間と比べるとそれほど不便は感じませんでした。しかし、運航している時間（インターセッション期間）は、朝の7時から夜の12時ごろまでであり夜遅くまでキャンパスで過ごすことができました。秋学期では、朝は同じ時間から深夜1時まで運行しておりKIT（扇が丘-八束徳シャトル）と比べて便利で学生が快適に過ごせる環境が整っていると感じました。

さいごに

派遣留学を通して語学はもちろんのこと文化の違い、多様性について学ぶことができました。キャンパスで生活を送るだけでも様々な人種の学生を見ることができます。また、自分にアクセント（訛り）があるように出身地の異なる学生の英語を聞くことによってアメリカという国がメルティングポットと呼ばれていることを体現することができました。この経験から、「流暢」に英語を話すと言うことを考えると、必ずしも白人のネイティブが話す英語だけがその定義に当てはまることではないように思えます。私を含め多くの学生がペラペラに話せるようになりたいと英語の勉強を始めますが、アメリカで生活をしている人を見るとラテン系やアジア系など様々な人種の方がそれぞれの英語を駆使して生活を送っています。このような方々の英語は流暢と言えないのでしょうか。アクセントのない英語を使うことも大切ですが英語を学習する上で大切なことは、どのように伝えるかではなく自分の知っている英語を最大限発揮して曲りなりも自分の言いたいことを伝える、話すと言うことだと思います。その次の段階に洗練された英語が自ずとできるようになるのではないかと思います。

最後になりますが本派遣留学をサポートしていただいた方に心から感謝申し上げます。